

ふる里探訪

文/水上薩摩

なりました。
昔から「かねのとり」と呼ばれ、また、漢文風に「銅華表」とも呼ばれます。

さて、だれがいつのころ建立したのでしょうか。日ごろはあまり気が付きませんが、鳥居に向かって右の柱に詳しく刻まれています。願主は、鍋島信濃守勝茂（佐賀藩主）。時は、寛永十四年（一六三七）八月吉日とあります。

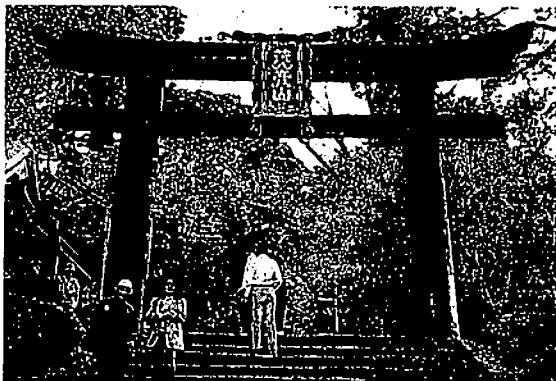
鳥居は、たいてい木が石で作られていますが、銅製の鳥居は珍しいです。その大きさも大したもので、高さが六・九メートルもあり、銅版の張り合わせではなく、いわゆる銅無垢といわれるもので铸造されています。形式は明神鳥居という最も多く見られる形式です。島木・笠木に反りがあり、両端が斜めに切られています。両脚の柱の頭の部

に転落しました。供の家来たちが、驚慌て谷に下りてみると、不思議なことに、直茂公は怪我一つなく、いつの間にか右手にしつか遠い佐賀の藩主がなぜこんなところに大きい、しかも銅製の鳥居を寄進したのでしょうか。「佐賀の殿様は、日ごろから彦山権現を崇敬していたので、島原の乱（重い年貢に苦しむ農民とキリストン信徒が連帯し、天草（益田）四郎を盟主として起こした大きな一揆）の征伐の戦勝祈願のためだよ」、「いや乱は、その年の十月二十五日に起つたのだから2カ月以上も前に一揆勃発の情報を得るわけがない。こんな立派な銅の鳥居を寄進されたのは、やっぱり殿様の信仰心が篤かつたからだよ」とも、いわれています。

勝茂公の父君直茂公が若いとき、彦山に参拝し下山のとき深い谷底

英彦山神宮の銅の鳥居
(国指定重要文化財)

英彦山神宮の銅鳥居は建立の当初から、英彦山の修驗道の靈山としての署名とともに、その壮大さと銅製で、さらに、靈元法皇御宸筆の勅額であることから有名に



に転落しました。供の家来たちが、驚慌て谷に下りてみると、不思議なことに、直茂公は怪我一つなく、いつの間にか右手にしつか遠い佐賀の藩主がなぜこんなところに大きい、しかも銅製の鳥居を寄進したのでしょうか。「佐賀の殿様は、日ごろから彦山権現を崇敬していたので、島原の乱（重い年貢に苦しむ農民とキリストン信徒が連帯し、天草（益田）四郎を盟主として起こした大きな一揆）の征伐の戦勝祈願のためだよ」、「いや乱は、その年の十月二十五日に起つたのだから2カ月以上も前に一揆勃発の情報を得るわけがない。こんな立派な銅の鳥居を寄進されたのは、やっぱり殿様の信仰心が篤かつたからだよ」とも、いわれています。

勝茂公の父君直茂公が若いとき、彦山に参拝し下山のとき深い谷底

ふる里探訪

文／水上薩摩

出羽国の羽黒山（山形県東田川郡）

して彦山神に奉幣し給い、天下泰平を祈願され社壇を改めたとい

ころがうかがえるようです。（「福岡県の文化財」）

と称せられていました。一般的には、講堂とは多くの坊さんたちが

とて講堂とされています。〔英彦山の民俗〕、現在のものは、棟札によれば元和二年（一六一六）当時小倉の城主

細川忠興公が再建ということです。

集まつて法を講ずるという意味の場所で、本尊様の仏像を安置する

金堂よりも大きい堂です。中央に

仏壇を設け（禅宗では仏像を置かない）その前・左右に論議台を置いて勉強するのですが、また儀式的なことなどもしたりすることもあるでしょう、重要な建物です。英

彦山では明治になつてから仏法をやめて神道だけを祀るようになりますから、老幼の人たちでも英彦山では明治になつてから仏法をやめて神道だけを祀るようになります。またから、老幼の人たちでも英

彦山では明治になつてから仏法をやめて神道だけを祀るようになります。向拝（こうはい）の中央に一株の万年背（おもと）のすかし彫りがありますがその葉に虫食いの跡まで表現されています。また、浪に鯉、日月、浪、花、雲等の表現にも戦国の世がやつと

英彦山神宮奉幣殿

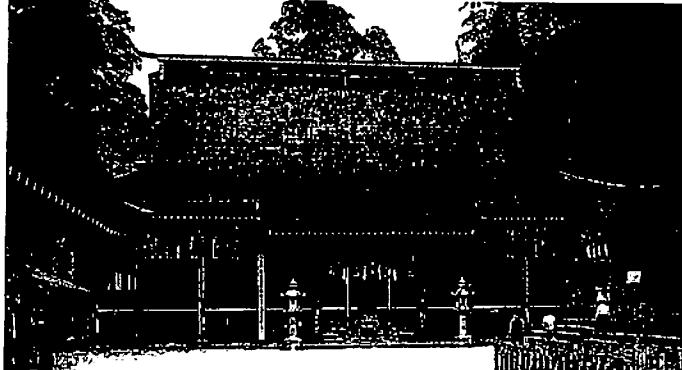
（国指定重要文化財・明治四十年指定）

彦山の修験道は文武天皇のころ（約一二〇〇年前）役小角が開いたと伝えられています。古くから大韓堂は、社伝によれば天平十一年（七四〇）聖武天皇が勅使を

彦山の頂上まで登らなくてもここから参拝ができるように奉幣殿に改めました。

大韓堂は、社伝によれば天平十一年（七四〇）聖武天皇が勅使を

彦山の頂上まで登らなくてもここから参拝ができるように奉幣殿に改めました。



ふる里探訪

文/水上薩摩

英彦山玉屋窟

添田町内の皆さんほどなたでも「しゃくなげ荘」や「酒源の泉」はご存じでしょうが、しゃくなげ荘から鬼杉の方へ進んで行くと左に別れる道があります。この道を五・六分も進むと玉屋神社があり

境内への登り口の道には節くれだった木の根が浮き上がって美しい模様を作っています。境内はあまり広くありませんが、神社の後ろは切り立った岩壁になっています。向かって右側に窟があります。この窟が、昔、行者が修行をした処です。始めは般若窟といわれていましたが、玉屋窟と呼ばれています。

ここで窟のことについて少し説明させていただきます。窟とは大きな岩壁の窪んだところです（入り口の處をちょっと細工しなければ雨風が入つてくるような場所です）。一例をあげますと、毎年秋に落合地区の方たちが盛大にお祭りをする姥ヶ懸が窟の一つです）修行者は窟に籠もって、草根本

ます。小さな社ですが美しい木立に囲まれ、前には清らかな谷川がひそやかにせせらぎの音を立てています。

境内の皮や自然の果実などを食べて（ほんとうにこんなことをしては身がもてません、米なども少しは食べたはずですが、粗衣粗食をして、という意味で）修行した場所です。このような窟が彦山に四十九ヶ所あります。昭和五十年にそれらの窟が第一から第四十九まで、あつたそうです。昭和五十年にそれらの窟が第一から第四十九まで、どこにあるかを調査しましたが、まだ分からぬ窟があります。

お話を始めにもどしますが、その第一窟が玉屋窟なのです。彦山の古い書き物「彦山流記」によりますと、

ここは、彦山権現様が日本國の隅々までの人々を救い、ご利益を与えてくださいます。窟とは大意の宝珠」をお持ち帰りになり、この窟の奥のほうにお納めになりました。このあたり（豊前）に住んでいた法運さんという上人が、どうしてかこのことを知つてこの窟に籠もつて修行しました。（つづく）

年間もです。（孫悟空が振り回す武器的な如意棒ではなく、日本國中の人々を救済する力のある珠ですから、ちょっとやそっと探してもくらいで見つかるもんではない）法運上人さんは一所懸命に金剛般若經をいねいに儀礼に則つて読誦され、三所（中岳・北岳・南岳）の権現様と、宇佐の八幡大菩薩にお祈りしました。（つづく）



しかもサービスはますます念入り。
どうもおかしい？

法運上人はいよいよ一生懸命に修行を続けます。老人もよく世話をしてくれます。

ある日、法運上人は老人にいいました。「ここで修行している私はほんとうにうれしい、今ここあなたと約束をしよう、師と檀家との約束は未来永劫のものである。私が修行の結果、如意の宝珠を得たならば、それをあなたにあげましょう」といいました。老人は大喜んで帰ってきました。

文／水上薩摩

ふる里探訪

英彦山玉屋窟

(前号のつづき)

ところがある日から何処からともなく一人の白髪の老人がやつてきて、なにかと上人の身の回りのお世話をするようになります。上人が「あなたはどうやら来るのでですか」とたずねると、「この山の近くのものです」とのこと。

国中の人々を救うために十数年間も窟に籠もつて難行苦行を続けて宝珠を得たならば老人にあげるというのです。これはちょっと軽率だったのではないか。法運上人の感謝の気持ちが深かつたとは思います。相手の老人はただものではなかつたのです。

その後まもなく修行の甲斐あつて、上人は「あなたはどちらから来るのでですか」とたずねると、「この山の近くのものです」とのこと。

ところがある日から何処からともなく一人の白髪の老人がやつてきて、なにかと上人の身の回りのお世話をするようになります。上人が「あなたはどこから来るのでですか」とたずねると、「この山の近くのものです」とのこと。

また師壇の約束は永劫のものです。どうして約束を破るのですか。私は、あなたが私の師であつたことを忘れます」といつて立ち去りました。こんなことからこの坂を師と呼ぶようになりました。

法運上人はその場で先年の約束のことを考えていました。そうしているとあの老人が又やってきました。そして「言葉だけよいから「宝珠をやる」といつてください」といいました。上人は口先だけでよいならば簡単なことだと考

え「宝珠はやるよ」といいました。老人は「ああ、やつと思いをとげることができた、よかつた、よかつた」といつて去つていきました。

上人はなんだか変だなあと思われて手許を見ると宝珠がありません、上人は老人の言葉の呪力にかかりました。老人は「これは長い間修行してやつと手に入れた宝珠である、人に譲ることはできません」といいました。老人は「上人様に二言はないはず、上人様はすでに五戒三帰の徳をお持ちです」

(次号につづく)

ふる里探訪

文／水上薩摩

英彦山玉屋窟

(前号のつづき)

約束は永劫のものだなどといつたのを忘れていたのです。今なつて考えると、老人は初めからそつもりで、時々修行中の上人の所にやつてきて奉仕をしていたのです。老人は言葉の呪力によつて球を奪うなど大したものです。

しかし、上人もいまさら宝珠を渡したくはありません。十数年も修行を積んだのです。上人はなんとかして奪われた宝珠を取り返そと、「火界の呪」の印を結んで、老人の走り去る前方に投げました。すると老人の進む前に火が起こり、それはたちまち燃え広がり、老人は一歩も進むことができません。

老人は、仕方なく上人の所にまい戻つてきました。それでこの地を「焼尾」といいます。(お話をすにかかったのです。十数年も前に「修行の甲斐があつて如意の宝珠が得られたならば、あなたに上げるよ」と老人にいつたのが軽率だったのです。念入りにも「師檀の

約束は永劫のものだなどといつたのを忘れていたのです。今なつて考えると、老人は初めからそつもりで、時々修行中の上人の所にやつてきて奉仕をしていたのです。老人は言葉の呪力によつて球を奪うなど大したもののです。

ただのではなかつたのです)まことのお姿を現された宇佐八幡様は、なおもお言葉を続けられます。「私は、日本国中がよく治まるよう努力しているところであるが、今この宝珠を手に入れるこ

とによってたちまち国民が幸せになるようになります。

また、祭迦入滅後、仏の教えがだんだんうすれ、二千五百年後には、この世は真暗闇になる、(それは、偶然にも平成の現代にある)そのとき弥勒菩薩がこの世に現れて、人々を救つてくださるのである。そのため前にもつて伽藍を建立し、弥勒寺と称し八幡の神宮寺どし、宮領(莊園)のうち八十荘を分けて寺領とし、その寺の最高の地位の別当に、あなたになつてもらうつもりです。この約束は永劫のもので、お互に修行と

教化を助け合いましょう」といいました。この話し合いは、双方とも目的は同じことなので上人も協力することになりました。

※神宮寺 神社の境内または近くに建立される。神仏混淆の考え方。

※弥勒寺 奈良時代に現在の大字南宇佐に建立され、聖武天皇が寺田を施入されました。昭和二十九年三十五年、大分県教育委員会による発掘調査で、講堂・金堂ともに七間×四間もありましたが、建久三年火灾にあい再建され、寺域は東西・南北ともに百五十メートルだつた。そうです。調査のとき出土した瓦のうち最も古いものは、天平時代のものだつたそうです。

明治維新、神仏分離で廃寺になりました。火災のあつた建久三年は、鎌倉時代、曾我兄弟の敵討ちの前年です。

*仏説では、弥勒菩薩は五十六億

七千万年の後、この世に現れてくださると。(間に合ひそうもない)

ふる里探訪

文/水上薩摩

英彦山玉屋窟

(前号のつづき)

法蓮上人のお話をたいへん神話めいています。それでも記録があるのです。「続日本紀」という古い書物に大宝三年(七〇三)九月の記事に法蓮(豊の法師)は医術がたいへん優れているということ

で天皇から褒美をいただきました。褒美は品物ではなく「豊前国の野四十町」ということです。本当はいたくものなら「田畠」の方がよかったです。そういうわけにはいかなかつたのでしょう。しかし、病人をなおしてやるには薬草などを採集するのによいだろうと朝廷では考えられたのでしょう。「続日本記」という本の実物を見たことのある先生のお話では、医術の医という字は旧字体「醫」ではなく酉の部分が巫になつてゐる「醫」だそうです。「巫」という字は有名な神社にゆけば白い上衣に赤い袴を付けた女性が御守りや御みくじを頒けてくれますが、もともとはお祈りをして神様のお言葉を取り次いだりする人です。もちろん男性もいましたでしょう。

昔は医学が進んでなく、いい薬もないでの神仏にお祈りしていたと

思います。法蓮さんは薬草にくわしかつたでしようが、お祈りの力はより一層すぐれていたはずです。法蓮さんのお祈りはたいへんよかったです。法蓮さんは褒め目があつたのだと思います。漢和字典を見ると「巫」は「醫」に同じ、「醫」を見ると「巫」に同じともあります。法蓮さんは褒め目をいただきました。

老五年(七二二)「宇佐ノ君」の姓をいただきました。

「続日本紀」という本は日本書記に続く勅選の歴史書で四十巻もあるもので、文武帝の即位の年から桓武帝まで(六九七~七九一)のことを見たときのトッピングクラスの学習者たちのチームで仕上げた本です。

◎修行者をお世話する童子

ある窟で修行している行者がありました。その行者のお世話をしている赤髪の童子がいました。また、その辺りの窟に修行者がいて切髪の童子がお世話をしていました。

あるとき、一方の窟が他の窟から筈を借りましたが、なかなか返してくれませんでした。筈を貸したほうはそのままになつては困ると思つたからです。赤髪の童子がお使いで返してもらひに行きました。返してもらつて途中まで帰つてくると切髪の童子が追いかけてきて、なにか言つたかと思うと持つていていた筈を奪おうとしました。もちろん赤髪の童子は取られてたまるかと抵抗しました。(仏教の世界では童子とは、姿がたちは子供っぽいですが、超人間的な能力を持つているのです)二人の童子は必死に引っ張りあいました。ところがどちらも力が強いので、とうとう筈が真中あたりから切れてしましました。二人の童子はそれぞれ半分ずつ持つて帰つたということです。半分になつた筈では使い物にならんと思うけど。(「彦山流記」から)